種子を播種する方法と耕起せずに播種して改良する方法とがある。

いずれの場合も除草剤を用い、石灰を施して酸性の矯正を行い、充分に施肥することが必要で(特に燐酸肥料)、九月中旬に播種するのが適当といえる。

おわりに

以上述べたように、酪農はますます発展するであろうが、低乳価時代は到来した。否、そうでなくとも農業の本質からいつて、緑飼料を栽培しこれを中心とした酪農でなければ大きな発展は望めない。

酪農成功の鍵はいかに経済的に、栄養的に、うまく飼料作物を栽培して行くかがその重要点といえる。(誌面の都合で原稿の一部を補遺訂正いたしましたことを御詫びいたします。編集部)

花木漫録

原　秀　雄

ハコネウツギ　六月の初め頃、函館本線の列車に客となつて、目を左右の山林に向けると、時々丈の高い樹頭に、白い花を太い長い穂に咲くトチノキが、車窓のうしろに流れ去るのと同時に、赤い花を葉腋にいつぱいつけた、高さ二米から二米半位の灌木を見ることがある。これがこれから記すハコネウツギの一族のタニウツギで、ハコネウツギは、実はこのタニウツギに似て花がはじめ白く、漸く花が老化して次第に赤く変る性質があり、中には初めから紅をふくむものさえある。この一族は、どの種類でも枝の髄が太くて白い。ハコネウツギの葉は幅が広く、楕円形で先がとがり、鋸歯があつて、短い葉柄で枝に対生する。花はこの葉の腋から簇り出て咲くのであるが、花冠は先が五つに裂けた筒形で、基部が急に細まつている。先に記したように、老化すると、先の方から赤く変る。それで花の盛りには、白い花と赤い花とが入り乱れて咲いているように見えるので、ゲンペイウツギ、またサキワケウツギの異名があり、この他ヤマウツギ、エドウツギ、ダイホウウツギ、ハナウツギ、シマウツギなどの名がある。ハコネウツギのハコネは相州箱根の名にもとづくものと思われるが、実をいうと、箱根にはこの木の自生はなくて、この木の自生地は、北は北海道の松前(福山)地方から奥羽地方、南に飛んでは相模、安房、伊豆から伊豆七島あたりがそれである。そして、箱根にはこれと似たニシキウツギという種類が沢山に自生し、筆者も一昨年(昭和三二年)六月箱根に遊んだ折には、これの花を山中到る所で見ることができた。それで、古くはハコネウツギもニシキウツギも、共に同一のものとして箱根にあるからというのでハコネウツギの名で呼んだものと思われる。

ハコネウツギの名は貝原益軒の花譜に載せられたのが、文献に見えた初めということである。因にニシキウツギというのは、二色ウツギの意で、錦ウツギではなく、これもハコネウツギと同じく、白く咲きはじめ、紅に変るので、二色といつたまでのことである。

渡島の松前地方は、北海道でも暖かい土地で、ツバキが育ち、ネムノキが花開き、スギやヒノキアスナロが高々と幹をのばし、ヒメアオキが自生し、モウソウチクの籔も見られる所であるから、そのような暖かい地方に自生するハコネウツギは、寒さに弱くはないかと心配する向もあろうかと思われるが、ハコネウツギにはそのようなことはなく、極めて寒さにも強く、札幌附近の冬ならば何の障りも起さない。それで庭にはタニウツギと共に、よく植付けることができる。ハコネウツギは、その名が花譜に載つているところから見ると、すでに元禄年代以前から、或は少くともこの時代には、庭木又は花木として用いられたものと見てよいであろうが、この本に一年おくれて世に出た花壇地錦抄にないところからみると、余り普通には用いられていなかつたとも考えられよう。このハコネウツギはスイカヅラ科に属し、これと同属の植物には、高い所に黄な花をつけるウコンウツギがあり、タニウツギ、ハコネウツギなどはそれより低い山林地に見られる。この他道外にニシキウツギ、ヤブウツギ、ビロウドウツギなど、色々の種類があつて、それぞれに花の時には美しい。

ハコネウツギは培養上余り難かしいことはなく、植付け放しでもよく毎年花をつける。只枯枝や、前の年に花をつけて生長のとまつた形の悪い枝などを切り去り、その上前年生じた若い強い枝を残すように剪定して、適当に枝透しを行うとよい。また育苗は実生、株分、挿木、取木などによるが、その中でも挿木は最もよく、前年生の枝を春発芽前、三〇～四〇センチに切りそろえて、水湿のある半陰地に挿せばよく発根するから、これを翌春陽地に植出して育てる。この木は相当の陰地にも堪えるが、やはり相当程度の日向地であることが望ましい。

ハナカイドウ　バラ科の落葉小喬木で、カイドウの名は海棠の字から出ている。カイドウの名をもつ植物には色々のものがあつて、ミツバカイドウ(ズミ、小喬木)、シ

ュウカイドウ（多年草）などと、色々の植物にカイドウの名を見られるが、何れもその花がカイドウのそれのように美しいのによつてつけられた名である。

北大植物園の温室に近い池のふちに、毎年五月の末から六月の初めにかけて、このハナカイドウが木の枝一杯に紅の花を開いているのを見た人も多いと思うが、ハナカイドウと種類的に近い植物には色々の木が本邦に自生する。ノカイドウ、ツクシカイドウ（チャカイドウ）、ズミ（ミツバカイドウ、ヒメカイドウ、コリンゴ）、エゾノコリンゴ（ヒロハオオズミ）、オオズミ（ズミ、ヤマナシ、ヤマリンゴ）などがそれで、またリンゴの類も、カイドウズミも、これに近縁の植物である。またカイドウ類には特にミカイドウとよぶ種類もあつて、これにはナガサキリンゴ、マルバカイドウなどいう異名もある。上記の中リンゴの類以下は渡来した植物である。

ハナカイドウは中国西部の原産で、その花は本来一重咲であるべきだが、本邦に栽培されるものは多くは半八重で、花梗がほそく長く垂下し、半開の形で咲く。もとより半八重といつてもその程度には色々の段階があり、且つ雄蕊は多数に残つている。この弁化の程度のすすんだ重弁のものをヤエカイドウ、枝垂性のものをスイシ（垂絲）カイドウという。ハナカイドウは高さ八米ほどに達するものもあり、枝は割合に細くて、はじめ毛があり、後暗紅紫を帯びて平滑となる。枝の先に長枝を、その腋に短枝を生じ、その短枝に花をつけるが、この短枝が刺針状になつて残ることがある。この短枝が刺針状になることは、ズミ、エゾノコリンゴなどにもよく見られる。花の色が蕾の時に濃く、花開いて薄れることは、他の植物にも広く見られるが、ハナカイドウでもその傾向があつて、蕾では濃紅、開いてはやや色が薄れる。

文明年代に書かれた写本、下学集にカイドウの名を見るのが、今わが国で最も古いとされているが、それから少し下つて長享三年（一四八九年）即ち今から丁度四七〇年前に出た尺素往来をはじめ、色々の古文にカイドウの名を記されているが、元禄年代頃までの文献のカイドウは、何れも今のハナカイドウではなくて、ナガサキリンゴ、即ち今日いうミカイドウであるというのが、宮沢文吾博士などの説である。とすると、ハナカイドウはミカイドウよりずつと後に本邦に伝わつたものと考えられるが、色々の説を総合してみると、凡そ今から二百年余り前に、この木の本物が輸入されたろうとされている。それでミカイドウとの区別を立てるため、このハナカイドウという名がずつと後世につけられた。

ズミなどでは、花の着く年には葉のあるなしがわからぬ位に咲くが、その翌年は殆ど花をつけないといつた隔年開花を起すこともあるが、ハナカイドウではこのようなことが割合に少く、殆ど毎年枝もたわわに花をつけ、隔年開花といつたことは顕著でない。陽地で水湿にもことかかぬ土地を好む。普通ハナカイドウはマルバカイドウ（ナガサキリンゴ、ミカイドウ）の実生砧に居接（五月上旬種子を床蒔し、後畦幅六〇センチ、株間一二～一五センチ位に移植肥培し、翌春発芽前、これにそのまま接木（切接）する）するか、又は芽接を七月頃行つて育苗する。切接の場合、接穂には二芽をつけ、砧は地上六センチ位の所で切り、接いでから接穂のかくれるまで、土を盛り上げておく。活着して発芽をはじめてから、地際に薄い液肥を施して生長を援けると、秋までには六〇～七〇センチにはなるから、これを更に三～四年育ててから庭に植出す。移植の時期は勿論早春発芽前がよく、発芽してからでは生育を害することがある。

また鉢に取つて盆栽又は鉢植として培養する場合にも、接木後三～四年生のものを用いる。先ず春発芽前に掘上げ、根と枝とを剪定して畠に植込み、更に翌春これをくり返して後、次の春根と枝とを剪定して鉢にとる。

（北大助教授・植物園勤務）

新規

会員募集

雪たね同友会

雑誌「牧草と園芸」は勿論既に会員になられた方々から大変な好評を博して居ります。今が入会の絶好期です。直ちに御入会下さい。

（同封振替用紙裏面の案内を御覧下さい）

…酪農家必携の良書案内…

飼料作物栽培の手引

昭和二十九年初版発行以来皆様の御好評をいただいて参りました。新らしい酪農の在り方を真剣に考えなければならない今日、全国酪農家必読の良書として御奨めいたします。

売価　送料共　百　円

草地改良
—著眼と事例—

熱心なる全国酪農家よりの強い要望に応え各種利用目的に応ずる草地は如何になすべきかを実際事例に基き解説した新版書『飼料作物栽培の手引』の姉妹篇としてお奨め致しました。

売価　送料共　百　円

草地農学

農家も、農林指導者も、農政家も凡そ農業に関りある人々の必読の書であり、日本農業に希望をもたらす良書。

売価　送料共　千二百円